

(2) 大阪市立鶴見橋中学校

木下 祐介 （大阪市立鶴見橋中学校 教諭）

川島 彰允 （大阪市立鶴見橋中学校 教諭）

大阪市立鶴見橋中学校の木下です。本日は、このような場所で、私たちの学校が発表させて頂くことは本当に恐縮なんですけども、せっかくなので、私たちの学校でずっと取り組んできた防災教育について発表させていただきます。



木下 祐介先生

1.川島です。ここからは私が本校の防災教育についてご説明させていただきます。本校の防災教育は大きく分けて、『学び』、『実体験』、『発信』の三つに分けてご紹介させていただきます。お手元のマニフェストにも、防災教育の取り組みを書かせて頂いています。

2.まずは『学び』についてです。午前中の黒潮町の防災教育の取組のサイクルとまさに同じなんですけども、本校の学びというものも、受け身になるような受動的な学びではなく、自分達の足を使って現地に赴き、しっかり学ぶということを大切にしております。



川島 彰允先生

左上の方が東北からの学びということで、今年で4回目になるんですけど、震災後毎年、代表の生徒が東へ伺わせて頂いております。その横に教職員視察とありますが、大阪市の「頑張る先生支援事業」という政策がありまして、本校は3年連続でその政策を受けさせて頂いております。教職員の東北視察、また和歌山、ここ高知、新潟等、様々な所の先進的な取り組みをされている学校を視察をさせて頂いております。私自身も今年の2月に始めて東北に向かうことができました。

春と夏の年2回、消防署のご協力を頂きまして、大型バスを貸し切って生徒50名近くを連れて、校外防災フィールドワークに行かせて頂いております。こちらは和歌山であったり、阪神淡路大震災のあった後の記念館であったりその現地に足を運ばせて頂いております。

専門家による学習会です。こちらは学校の中で座学で行うんですけども、この写真は、舞子高校の環境防災科にいらっしゃった諏訪先生にお越し頂きまして学習会を行いました。この取り組みの大きなポイントは、教職員だけでなく、子どもたちの防災の自主組織のリーダーと一緒にそこに交えまして、教職員と生徒が同じように座って、この学習会を受けることです。教職員も生徒も一つになって学んでスタートしていこうというような意味を込めて学習会を行いました。

3.続きまして『実体験』ですが、避難所訓練合宿が大きな取り組みの一つとなっております。先ほどの津田中学校さんも一泊二日の合宿の紹介がありましたが、本校でも取り組んでおります。ライフラインが限定された体育館での寝泊り、また今年は津波によって体育館が使えないということで、校舎の中でどこを使えるだろう、というようなアイデアを出しながら、子どもたちと一緒に作りました。

地域との連携が本当に課題で、うちの地域でも課題になっているんですけども、区役所の方に来て頂いたり、実際に警察消防の方と一緒に交流ができる機会でもあります。これも今年で4年目になり

ますが、何か新しいことをしようということになりました。そこで、生徒がそれぞれの家から一品食材を持ち寄って、その中でグループ分けをして、一泊二日で何を作れば乗り越えられるだろうかというようなサバイバルクッキングをしました。グループ分けをして、避難者役と誘導受付役に分かれて、実際に災害が起こって何分後に誰か来てっていう形で、混雑する受付所の中で混乱を経験するというような、少しでもリアリティに近づけるような活動を取り組んでおります。こちらの実体験の活動に関しても、子ども達の自主組織のリーダーが共にしっかりと考えて作る、ということを目指しております。東北に行った生徒、フィールドワークに行った生徒が学びを発表して、共有する場しております。

- 4.さらに『発信』という点ですけど、こちらは学びから感じたことを発信する、その中で子どもたちが自己肯定感を高めて、自分のやってきた事への達成感を感じる場として発信を作っております。

左側には、他校の教職員研修として、近隣校の中学校の先生に、自主組織が取り組んでいることを見て頂いて、子どもたちが、どういう思いで、どういう行動をしているのかを発表させて頂きました。その右は校区の小学校への出前授業です。右下は地域の様々な場所で、子どもたちが防災活動で学んだことを発表させて頂いております。中学校の先生や大人に発表するときは、子どもたちが立派にモデルになるような生徒、この様な思いを持っているというのを発表すると同時に、校区の小学校では、先ほどアクティブラーニングのお話もあったんですけども、自分よりも後輩の子ども達に教えるということで、しっかりと子ども達は学ぶことを意識して伝えてくれています。この小学校から「中学校に入ったらこの防災の組織に入りたい」というような声が出てきて、実際にその思いで、今年、中学校一年生になって活動してくれている生徒が7人おります。左下の岩手県の高校生がプレゼンというのは、今年4度目の東北視察で、初めて学びに行くだけでなく、本校の思いをしっかり伝えようということで、この様な取り組みをさせて頂きました。

以上のように三点、学び、実体験、発信という形で本校の防災教育は進めております。



1



2



3



4

本日の参加者リストを拝見すると、大阪から来られた方がいらっしやらなかったもので、せっかくですので私たちの町や歴史、なぜ大阪で防災教育をやっているのかというのを木下から話させていただきます。

- 5.これは観光名所なんですけどもご存知でしょうか。日本一高いビルとして、ついこの間できた『あべのハルカス』であったり、グリコの看板のあるのが『道頓堀』です。下は『通天閣』です。私たちの校区は、ここから一駅くらいしかの距離にあります。子どもたちは、自転車でこちらに行くことができるような、繁華街にも近い地域でもあります。
- 6.学校は西成区にあるので、たぶん名前のご存知だと思いますが、繁華街よりも近い場所に、『あいりん地区』と言われている場所があります。全国で最も日雇い労働者の方がいらっしやる地域であります。路上生活の方が本当に沢山いらっしやいます。そこから学校まで自転車で10分くらいの距離にあります。

こういったところで育っている子どもたちなんですけども、ちょっと想像してみてください。私は8年前に講師として初めてこの学校に来させて頂いたんですけど、当時はとても今のように防災教育ができる環境ではありませんでした。辛かった時期は、みんな勉強してなかったです。もう学校が学校じゃないといえますか、名札を付けている、付けていないのレベルじゃなかったです。私服で学校に来る。好きな時間に学校に来る。路上や校内で喫煙する。突然学校からいなくなる子も沢山いるような状況でした。こういった状況でとても勉強ができるような環境じゃありませんでした。

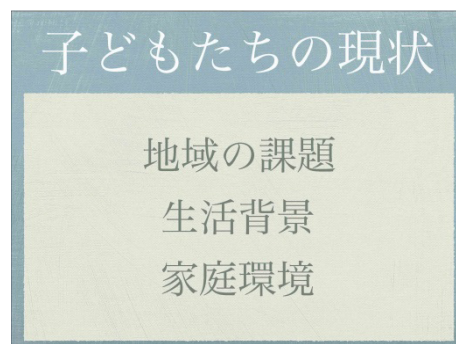
- 7.子ども達の現状としまして、地域の課題、生活背景、家庭環境という、三つをあげさせて頂きました。まず地域の課題としましては、すぐ近くに難波などの繁華街がありますので、ガールズバーとか性犯罪、覚せい剤の問題等も非常にある地域です。次に生活背景においても、生活保護や何らかの支援を受けている生徒の割合が高く、経済的にも非常に辛い地域であります。それから家庭環境については、母子家庭と父子家庭の割合が半分以上で、親に虐待やネグレクトを日常的に受けているという生徒もいます。3年間担任させて頂いた生徒なんですけど、生徒会長とクラブのキャプテンをしていたんですけど、毎朝5時に起きて、自分にご飯を作って、洗濯物を干して、それで朝練に来ていました。「ここはどういう学校なんだ」という感じで、私自身も当初は「こういう環境の中で教育なんてできないんじゃないか」と思いました。親が「勉強なんかなくていい」と平気で言う家庭も多かったですので、授業が成立しないような状況でありました。



5



6



7

8.しかし、東日本大震災が発生したときに、当時の校長先生が、「自分たちできることは何か、もっと考えよう」と言われました。すると、有志の3人の教職員が、6月に突然南三陸にボランティアに行かれました。そして、実際に現地を見て、帰ってきた3人が、「これはもう真剣にやらなきゃいけない」と思ったのがきっかけでした。その年の夏に、地域の応援もありまして。生徒3人と教職員2人が東北を訪れさせて頂きました。

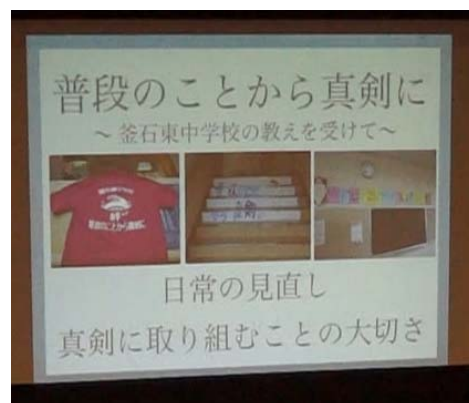
9.この写真は、釜石東中学校さんなんですけども、私どもの生徒会長と副会長の3名が、当時の釜石東中学校の生徒会の生徒さんと交流させて頂きました。そのときに交流の中で、生徒さんから「普段のことから真剣に」という言葉を教えて頂きました。この3人が帰ってきて、全校集会でそのことを報告したんです。普段の集会では教師の話なんて聞かない状況だったんですけど、まだはつきりと覚えてるんですけど、そのときは学校の部屋が静まり返るように、子どもたちが3人の話に耳を傾けていました。それを見て、「もしかしたら学校が変わるかもしれない」と思いました。「普段のことから真剣に」というのは、「避難訓練を日常的に真剣にする」というメッセージだったみたいなんですけど、私たちは「全て日常見直して、全ての事真剣にしないといけない」という教育活動を行っております。

10.「全ての事を真剣に」ということで、挨拶、服装、掃除、遅刻といった単純なところから始めたんですけど、そういうそういったことに前向きになってきました。その中で、これは大阪城公園という所なんですけども、ボランティアに自分らで参加したりするようになりました。注意しても聞かなかった生徒も、そういうムードに流されるといいですか、真面目な生徒に声掛けられて、学校全体が前向きなムードになっていきました。これは自慢したいんですけども、治安が悪いとか怖い地域だと思われている方いらっしゃると思うんですけど、この地域は本当に温かい町でして、そういういろんな課題のある方も受け入れるということで、本当に温かい学校なんです。

11.防災教育のスタートということで、子どもたちの方から「先輩みたいになりたい」と言われ、「じゃあ生徒会みたいな組織を作ろう」ということで、『子ども防災プロジェクトチーム』、子防プロと皆は言っているんですけども、そういった組織を立ち上げました。最初は有志5、6名で



8



9



10



11

始めました。校長先生から「あなたがやりなさい」と言われ、何もわからないのに「はい」と言いまして、担当になりました。この組織で、神戸に行ったり、消防局の人に訓練して頂いたりしました。三年生の担任をしていたんですが、辛い毎日で「何でこんなことしないといけないんだろう」と思ってスタートした次第でございます。

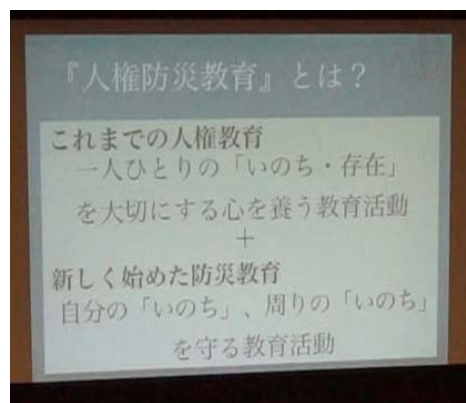
12.本校はずっと人権教育を大切にしてきました。これまでの人権教育は、「一人ひとりの『いのち・存在』を大切にする心を養う教育活動」ということで、本校は平成 22 年度から 24 年度まで、人権教育の指定校になっていました。そして、防災教育は、「自分の『いのち』、周りの『いのち』命を守る教育活動」と捉えると、「いのち」というフレーズが共通するんですね。ということで、私たちは、二つを合わせて『人権防災教育』としまして、教育活動を発展させようとしております。

13.たぶん大阪と他府県の方との一番の違いなんですけど、タイトルに「未災地」という言葉を使わせて頂きました。いつ災害が起こるかかわからないですが、実際にもし災害が起こったとしても、川は近くにあるんですけど、津波の被害はほとんどない地域なんです。ですが、先ほどお話ししたように、いじめの問題であったり、いろんな事件事故、あるいは火災など、そういったものはもの凄く近い存在です。なので、そういった「いのち」とか「つながり」を大切にする教育活動ということで方向を変換しております。もちろん、地震とか津波の訓練もしておりますけども、「命を守る」とか「繋がりを大事にしよう」という教育活動で今は行っております。

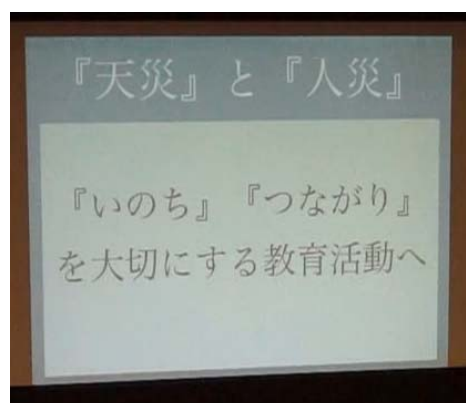
14.ですので、命の学校を目指して、今は頑張っております。

15.その中で、「本物との出会い」が大事だと思います。先ほどの三人の先生に、私が担当になったとき「東北行かなきゃいけない」と言われて、プライベートで無理やり連れて行かれました。お金を使うことで支援をしようとイベントだったんですけど、そこで語り部をして頂いた大槌町の男性に出会いました。津波で婚約者が流されたそうなんですけど、「今大事な人がいるんでしたら、大事にしてください」というような話を、生の現場で聞きまして、それまで「やらされてる」と思っていたんですけど、「やらなければならない」と自分の心も変わりました。

教育活動する中で、沢山の方と出会っております。つい



12



13



14



15

この間なんですけど、新庄中学校さんにも子どもたちと一緒に伺ってきました。旅館の女将さんに出会ったり、東北の現地の方の話をたくさん聞かせていただいて、私自身も変わりましたし、それを見て、子どもたちも変わってくれたというストーリーになっております。

16. どうしても代表の生徒しか現地に連れて行けないので、去年からなんですけど、「命の講話」を始めました。去年は岩手県の男性の方をお願いして、鶴見橋中学校に来て頂きました。その人の話を聞いて、やっぱり子どもたちが凄く変わりました。右の写真は阪神淡路大震災を4歳のときに経験された女性の方です。こういった体験した人の生の声、本物の声を聞くことで、子どもたちがどんどん変わってきております。

17. 「防災透明人間」という謎の言葉です。僕が、学校防災委員会という大人の会議も担当していて、週に一回授業の間に毎週やっています。最近子どもたちが本当に変わってきてまして、子どもたちから「こういうことをやらせて下さい」というようになってきました。だから私も防災の会議の書類を全部子どもたちに見せて、「これどうですか」と聞いて、「それだったら、こっちの方がいい」という子どもの意見をそのまま採用するようになっていきます。

ここで『透明人間』というのはどういうことかと言いますと、「教員はいるけど見えないような存在」といいますか、「黒子に徹する」といいますか、とにかく「子どもたちが主役になる」、「やりがいを感じるような教育活動」をしていかないといけないなと思っております。

18. 「人は人でしか変わらない」ということで、全国各地との心の交流というのが続けられております。本当に嬉しいんですけども、子どもたちがこのような状況のなかで輝いていくのを見て、被災地の方がこちらに勉強させてもらいたいという話になりました。右側は大槌町の高校生の方なんですけど、来月の連休のときに初めてなんですけど、大槌町からこちらに来て頂いて、子どもたちと交流をするというところまで発展しています。

左の写真なんですけど、私は中越地震を全く経験してなかったんで、つい先日ですが、旧山古志にも行かせてもらいました。「人は人でしか変わらない」と書いてあるんですが、これもお聞きした話なんですけど、この何年間で本当に沢山の人の学ばせて頂きまして、自分自身ここまで変わること事ができました。



16



17



18

19.続きまして、「持続発展可能な実践のために」ということです。先ほどの討論会でも孤軍奮闘されている先生、でもそれは後に続かなく発展しないという課題があったと思います。本校でも木下先生が、8年間、孤軍奮闘されてきました。私は鶴見橋中学校に赴任してまだ2年目です。昨年のことを思い出して話をさせていただきます。

あのような生活背景とか課題のある学校に赴任して、正直なところ、子どもたちの現状であったり、地域の現状に本当に度肝を抜かれました。その中で防災委員に入らせて頂いて、いきなり「避難訓練をなさい」とか「地震に備えろ」という話を聞いたときに、正直な気持ち、そんな事をやっている暇ないと。一年生の担任を持たせて頂いたんですが、学級崩壊していました。子どもたちと心が通わない、心がすさんでいるところで、新しく来た自分に対して凄い罵声を浴びせるといふようなところがありました。そんな中で、「訓練をなさい」とか「防災のことを語りなさい」と言われても何一つできなかったんです。

ただ、いきなりそんな状況に放り込まれたんですけども、先ほど紹介された「本物の命の講話」として、大槌町から来られた婚約者亡くされた男性の「本当に大切な人に『ありがとう』という言葉を送りて下さい」という話を聞いていたときの子どもたちの目の輝きと、その後に書いた感想、その後の行動というのが本当に変わりました。それを目の当たりにして、「防災教育って、こうやって何か子どもたちの核心に迫って、命から揺さぶっていくような取り組みなんだな」ということを学びました。そして、私も「やらせている」という気持ちが「自分からこれをやりたい」という気持ちに変わりました。私がそういう気持ちに変わると、子どもたちもその姿を見てくれて、特に防災の事をクラスで全て伝えているわけじゃないんですけども、素直な子ども達ですので、「取り組みが変わったな」、「行動が変わったな」ということをそのまま声に出して伝えてくれました。

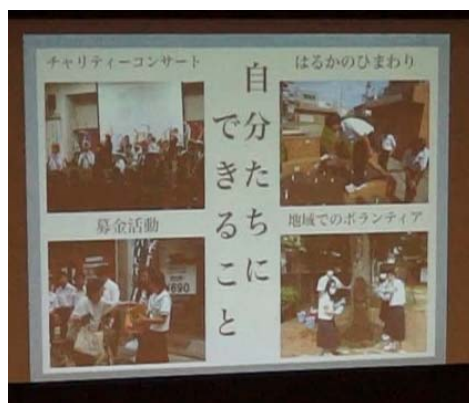
子どもたちを「学び続ける生徒に育てたい」と思うのであれば、まず自分に矢印を向けて、まずは自分が変わらないといけないということを、鶴見橋中学校の取り組みを通して教えて頂いたと思っています。

20.そんな中、昨年度の終わりから、私自身がボランティア活動をしていた経験がありましたので、「自分たちにできることを考えよう」、命を見つめたうえで、その命を何に使うかを子どもたちと一緒に考えたいと思いまして、ボランティア活動に積極的に取り組みました。子どもたちが何か一つ動くと、地域の大人であったり、周りの教職員の方々から、「ありがとう、偉いね」という言葉をもらえるんですけども、それが何よりの子どもたちへの報酬だと思っています。

左下のネパール地震の募金活動では、やったあとに「西成のおっちゃんおばちゃんが、こんな気軽に募金してくれると思わなかった」「みんなケチだから、きっと一円も集まらないんじゃないかと思った」と子どもたちは言ったんですけど、生徒達が大声で募金の声掛けたら、すぐに地域のおっちゃん



19



20

んおばちゃんが自分の小銭握って、入れてくれていました。その姿を見て、僕自身も西成を見る目が変わりましたし、子ども達も「自分達の地域って本当に温かいんだな」っていうことを口々に言っていた活動になりました。

これは、本校の文化だと思うんですけども、防災という言葉聞いたときに、「子どもたちをどうしたら輝かせることができるか」ということで、教職員の方々は工夫をします。右上の写真は、「はるかのひまわり」という取組で



す。阪神淡路大震災の跡地に咲いたひまわりの種を植えるという取り組みを、一年生の学年の先生方が、子どもたちとともに作り上げたプロジェクトになりました。左側はチャリティーコンサートです。木下先生受け持っている音楽部の生徒と学年主任をされている三年生の生徒が、チャリティーコンサートを行って、それを大槌町に返したいということで実施しました。当日 100 名以上の方がお越しになって、5 万円近くの募金が集まり、そのお金を大槌町に送ることができました。驚くことに、大槌町の方は、そのお金を違う災害で被災された方々のために使いましたというご報告を頂きました。このように、そういうバトンが人と人との繋がりで子どもたちにも受け継がれているということを感じています。

今回、高知に来る前にも、生徒がこの一年間のボランティア活動の総まとめの発表を防災と絡めてしてくれました。その前に、生徒が同様の発表してくれた時の話です。担当の生徒たちが、地域の皆さんの前で、「私達は地域のためにこういう活動しています」と立派な発表をしてくれました。そして、みんなから「頑張ったね」と言って褒めてもらいました。しかし、その同じ日に、校区の小学校の前の公園で、発表した彼らの同級生が、煙草を吸って、騒ぎ散らかしていると地域から通報されてしまいました。ついさっきまで「地域のために頑張ります」と言っていた中学生を率いていたのに、その直後に、地域に迷惑をかけている同級生を指導。このようにまだまだ課題もたくさんあります。ただ、先ほどの座談会でのまとめのように、「どうしたらその子どもたちを包み込んで、新しい実践ができるのか」ということをしっかりと学んで、今度は、「その子どもたちもこっちの輝かせる側にもっていけるような活動」をしっかりとしていきたいなと思っております。

本当にまだまだ課題があります。特に学力の問題が非常に辛いです。しかし、こういう活動によって自尊過程、自己肯定感が、昨年度もまた全国平均を上回りました。子どもたちは自主的に動いております。せっかくなので、この 3 年間で変わってきた子どもたちの様子を見て頂きたいと思います。今年の 1 月 17 日に阪神淡路大震災からちょうど 20 年ということで、防災土曜日授業を行いました。そのときに三年生が、「卒業する前に最後に後輩に伝えたいことがある」ということで、アドリブだったのですが、リーダーの子が後輩たちに伝えるという映像を見て頂きたいと思います。

それで、マニフェストに『鶴中未来宣言』を載せています。他の学校さんもされているようですが、これはぼうさい甲子園の防災未来宣言を拝見させて頂いて、鶴見橋バージョンを作ろうということ作成しました。前文は私が作っておりますが、映像は、子どもたちが考えた宣言文を全校生徒の前で発表する様子です。

『三年生の宮川です。私は今すごく後悔しています。一年間勉強しなかったことや、大切な人に「ありがとう」という言葉を言えていないことをものすごく後悔をしています。子防プロに入って後悔しているのは、後悔していることを今やっておかないと、そうやって震災のときに何も本当に後悔してしまうから。だからとりあえず伝えたいことは、「今自分がやりたいなと思っていること」、「伝えたいなと思っていること」は絶対にやってください。』



『三年生の金沢です。僕がまず言いたいことは、「誰かがやってくれるだろう」という考えをなくしてほしいことです。そういう考えを持っている人は多いと思うんですけど、やってくれる人は本当に少ないです。誰かはやってくれません。だから、本当に自分からやらないと、自分達たちが動かないと何も起こりません。逆に「どういうことを行動したらいいか」と言ったら、私がしゃべった時に自分の命を守ってください。自分の命を守るのは、どうしてもそれぞれの防災教育の力、またそれぞれの自己を守るための力、そういうことも少ないですけども、自分が死んでしまったら人の命は守れないので、まず自分の命を守ることっていう。とにかく命は大事なので、そこから皆さんを連れて行ってください。ありがとうございました。』

『鶴中未来宣言。鶴見橋中学校は、東日本大震災を受けて、「自分たちにできることは何か」と考え、先輩たちが東北を訪れました。そのとき学んだ「普段のことから真剣に」を学校のスローガンにたくさん取り組みを行ってきました。決してそのときだけで終わらず、先輩の意思を引き継ぎ、命の学校を目指し、何事にも一生懸命取り組んできました。東北の皆さんからのメッセージ、防災学習会、避難所訓練合宿、様々な活動を通して、命の大切さを改めて感じ、沢山のひとと繋がり、思いを伝えてきました。2015年、阪神淡路大震災から20年を迎えました。これからも私達は、この鶴見橋中学校をさらに発展させるために、未来に向けて宣言します。

一つ、今を大切に、今を一生懸命生き抜きます。

一つ、自分の命、周りの命を大切にする活動を広げます。

一つ、国と地域、社会、自然、かけがえのないものとの触れ合いを続けていきます。

一つ、もしもの時も生きる指導をし、地域の一員として子供を守ります。

一つ、感謝の気持ちや思ったことをその時言葉にし、行動に移します。

一つ、この時代に生まれた人間として、使命感を持って生き抜きます。

2015年1月17日、子ども防災プロジェクトチーム一同』

今しゃべっていた子も、本当に課題のある家庭の子ですし、一生懸命聞いてくれていた子たちも課題がある子です。私自身も防災教育はまだまだわからない部分もあるんですが、教育のプロとして、プライドを持って、先生方と一緒に教育活動に励むとともに、子どもたちがもっと輝けるような学校作りをしていきたいと思っています。このような会議の場所で発表する内容ではなかったかもしれませんが、以上で私たちの発表を終わります。

コメント：西本 貴俊 （黒潮町立佐賀中学校 教頭）

黒潮町立佐賀中学校の西本です。今の発表を聞かせて頂いて、日々先生方が子どもたちに真剣に向き合う。そして、先生方が変わり、子どもたちも変わる。その中で、子どもたちが自分たちで動いていく姿が、発表の中から思いとることができました。日々のいろいろなご苦労の中に、喜びを感じながら、実践されている先生方の力を大きく強く感じました。

まだまだ課題はあると思いますが、子どもたちと真剣に向かい合っている先生方の姿を見ながら、子どもたちは日々学習していると思います。そんな中で防災教育に取り組み、そして先生方が『人から学ぶ』という素晴らしい姿で、子どもたちに実践を伝えている。そして子どもたちが変わってくる。そういった姿の中から色々学ぶべきことがありました。

私たちの学校も、防災教育に取り組みながら、そして同じように人権教育を基盤としながら、日々の取り組みを行っております。今年は、若い防災主任の先生が中心になり、各学年部の先生でまとまって、前向きに防災教育に取り組んでくれています。ただ、まだ子どもたちが自主的に活動するまでには至っていません。

発表を聞かせて頂いて、やはり自分たちが学びながら、そして子どもとともに学習を深めていく。そして子どもたちの考え方を大切にしながら進めていく防災教育、そして人権教育、そして教育全体に波及していく力が、やはり大事であるということを学ばせて頂いたと思います。本当にありがとうございました。



西本 貴俊先生